



Title	ジョージ・シーガルの人体像をめぐる
Author(s)	原田, 紀子
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 164-165
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53041
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジョージ・シーガルの人体像をめぐる

原田紀子／大阪芸術大学大学院後期課程

ジョージ・シーガル (George Segal, 1924-2000) は、生きた人間の身体から直接に型を取った石膏像と、既製の工業製品や生活設備とを組み合わせ、20世紀のアメリカ的な日常の光景を表現した彫刻家として今日よく知られている。

シーガルは1961年に、人体から直接に型を取った人体像と既製の工業製品を組み合わせる方法で本格的に彫刻作品の制作にとりかかる。その翌年、アメリカにポップ・アートの一大旋風を巻き起こすきっかけとなったグループ展「ニュー・リアリスツ (New Realists)」に、アンディ・ウォーホル (Andy Warhol, 1928-1987) やロイ・リキテンシュタイン (Roy Lichtenstein, 1923-1997) らとともに参加した。そのため、シーガルの彫刻作品はポップ・アートとの関連からしばしば論じられている。確かに、シーガルの初期の彫刻作品にはポップ・アートに通じるモチーフも見られ、そうした一面では関連性があるといえるだろう。しかし、最近のシーガル論においては、近代の彫刻家や、古くは17世紀の画家たちの作品とも比較され、それらとの類似点が指摘されている。シーガルは、しばしば過去の芸術作品から関心のある主題を取り出し、自らの手法でその主題に取り組み、新しい今日的な問題を提起した。シーガルの芸術活動は、過去の芸術作品に対する真摯な研究が根底にあったのである。したがって、シーガルを一概に前衛的な作家として扱うことは一面的な見方であろう。

本発表では、シーガルの彫刻作品の制作プロセスを検討したうえで、ダダの「レディ・

メイド・オブジェ (Ready-Made Object)」や新造形主義の抽象美術作品との比較をそれぞれ試みることによって、シーガルの彫刻作品の独自性を考察した。

シーガルの人体像は、石膏のしみこんだ医療用の包帯を生身の体に貼り付けて型取りされる。シーガルはその際、包帯をつなぎ合わせた跡や溶けた石膏のしたたりを処理せず、人体像の表面を粗いままにしている。この方法が人体像に独自の肌合いを与え、観者の目を引きつけるのだ。また、シーガルにおいてはデフォルメや尺度変換の手法を用いない。生身の身体から直接型取り、その型取りのプロセスをも残す方法を選んだ。その方法は不安を掻き立てるような負の精神的作用をわれわれにもたらす。シーガルの人体像に彫刻たる存在価値を与えているのは、この独特の負の精神的作用だといえるだろう。この負の精神的作用によって、われわれはシーガルの人体像に引きつけられるのである。

その一方で、シーガルの人体像と組み合わせられた「物」は、われわれを突き放してくる。われわれは、普段それらの道具や機械に囲まれて生活しており、実際に使用したり利用したりしてよく見知っている。ところが、シーガルの「物」としてある道具や機械からは、普段われわれがそれらに接するときのなじみを感じることはできない。なぜなら、作品の置かれる美術館においては、われわれがそれらの「物」の記号性や機能性を利用することはできないのであり、ただ単に眺める対象として立ち現れてくるからである。

このように、シーガルの「物」は、デュシャ

ンの「レディ・メイド・オブジェ」に通じるコンセプト的な性質をもつ点では反芸術的な流れに与しているといえるだろう。しかし、デュシャンの「レディ・メイド・オブジェ」は、その色や形といった造形的なものには無関心であったのに対して、シーガルの「物」は、彫刻作品の一部として造形的な働きを担わされている。一見するとありふれた物品だが、シーガルの「物」にはモンドリアンの幾何学的抽象絵画にみられるような水平と垂直の直線による「構成」が隠されているのである。普段見慣れた物品がそのような「構成」を支えていることに気づくと、われわれはますます「物」に惑わされ、突き放されるのである。

以上のように、シーガルの彫刻作品においては、負の精神的作用をもたらす人体像に対して、「物」は明確な造形的意図をもって積極的にその存在を主張してくる。つまり、シーガルの彫刻作品は、全体を見渡すと、人体像と「物」とが互いに引き立て合っていることが分かるのである。このような、プラスの要素とマイナスの要素による調和が、観者と彫刻作品との間にこれまでにない新しい関係を生み出しているのだ。

シーガルの彫刻作品にはもとより台座はなく、人体像はわれわれの目線と同じ高さに置かれている。シーガルの彫刻作品は、一方的に芸術作品としての威光を放つのではなく、むしろわれわれと向き合うことを目的としているのではなかろうか。人体像と「物」からはあらゆる問いが発せられ、われわれ観者は、その問いに対する答えを考えていかななくてはならない。われわれは今まで、理想化された人体彫刻に例えば人間存在とは何かと問いかけ、その答えを委ねる立場であった。しかし、シーガルの彫刻作品は逆に、芸術とは何か、日常生活とは何か、人間のありどころはどこ

なのか等々の問いを発してくる。おそらく、たいていの者はシーガルの彫刻作品から発せられる問いかけにうまく答えることができず、不安になったり、思案したりするだろう。このような作品と観者との相関関係こそが、シーガルの彫刻作品においては重要なのである。神々や歴史的英雄に見下ろされるのではなく、なじみの場面に置かれた自分とよく似た姿の人体像に、自分自身のあり方について問われることは衝撃的であり、われわれはその答えを思案せざるを得ないのだ。